詰将棋全国大会レポート（７）

第７回全詰連全国大会

１９９１年５月

大阪市　山西福祉記念会館にて

参加者　１００名

詰将棋パラダイス　１９９１年６月号より

第7回

全詰連全国大会

報告＝柳原裕司

▶難波洋子

◀桂　九雀

▶脇　郁子

◀鹿野圭生

●出席者●

埼玉　橋本孝治、湯川恵子、湯川博士

千葉　栗山義史、駒場和男、摩利支天

東京　井上裕、井上弘之、大橋健司、岡本真一郎、門脇芳雄、金子清志、川清雄、久津間正勝、清水英幸、角建逸、相馬康幸、富樫昌利、藤井国夫、森田正司、山崎泰史、山村浩太郎、湯村光造、吉橋和夫

神奈川　馬詰恒司、江口恭一、鈴木龍晴、宮地寛、柳田明、山下雅博

山梨　柴田三津雄

新潟　吉田直嗣

愛知　関呑舟、成田忠雄、橋本守正、堀内真、山田剛

三重　坂口敏昭、清水一男、須藤大輔、田原宏

京都　池田秀三、上田吉一、太田慎一、川ノ上帆、菊田裕司、田代達生、平田正、穂上武史、山田康平、山田嘉則

大阪　明石六郎、池崎和記、伊藤純男、乾俊雄、浦野真彦、川崎弘、高坂研、酒井弘格、塩田洋、城村聡、千葉学、森信雄、野田達志、浜田博、林泰伸、平岡敏夫、弘光弘、保坂勝吾、水上仁、村山聖、守屋良介、柳原裕司、大和敏雄、若島正

兵庫　淡路仁茂、伊藤正、宇佐見正、枝川真也、加瀬繁光、神吉宏充、喜多真一、谷口源一、谷向奇龍、内藤国雄、中嶋弘、平井康雄、前垣良行、前田裕昭、安平昭二、山腰雅人

奈良　岩本修、岡田敏

和歌山　神崎健二

島根　高見秀夫

広島　広中亮一、山本善章

福岡　中岡清孝、西田弘、八尋久晴

●寄付金●

秋葉原ラジオ会館＝五万円、将棋天国社＝三万円、創棋会＝二万円、鶴田寿美子＝二万円、岡田敏＝一万四千五百円、門脇芳雄＝一万円、二上達也＝一万円、柴田昭彦＝五千円、八尋久晴＝五千円、湯川恵子＝五千円、山下雅博＝千円

●賞品提供●

秋葉原ラジオ会館、将棋天国社、詰将棋研究会、近代将棋社、東京詰将棋工房、内藤国雄、藤井国夫

（以上、敬称略）

▼第一部　前半

全日本詰将棋連盟の全国大会も今回で七回目。第五回名古屋、第六回東京……と続けば第七回は大阪で決まりである。5月4日、会場の山西福祉記念会館には、ぴったり百人が参加した。前回の百十一人には及ばなかったものの、大盛会といえるだろう。

第一部の司会は安平昭二氏。簡単な開会挨拶のあと、森田正司氏から、前日に再結成された全詰連の経過が報告され会場で承認された。全詰連は、詰将棋の普及と詰パラの支援が主な目的だが、会長に就任した岡田敏氏は「も

っかのところ全詰連の運営資金はゼロ。お知恵を借りたい」と参加者に呼びかけた。

続いて参加者紹介。本来なら一人ひとり自己紹介をして行くのだが、今回は催しだくさんで時間の都合がつかない。あらかじめ参加者には「参加者カード」に簡単な自己紹介を書いてもらっている。これを読みあげる、という方法である。ただし、どうしても自分で発言したいという方には、マイクを握ってもらった。

百人の参加者にはプロ棋士も交ざっている。内藤九段、淡路八段、浦野六段、森信五段、神吉五段、神崎五段、村山五段の七名だ。詰将棋の会にプロ棋士が多数集まるのが、関西の大きな特徴である。プロ棋士は招待の予定だったが、どの先生も「一般の参加者と同じですから」と、会費を払って来てくれたのには恐縮した。

内藤九段は「詰将棋は実戦に役立たない、と言われることもあるがそんなことはない。必ず終盤が強くなる」と力説。

淡路八段は隠れた詰棋ファンで詰パラの作品は毎月、全題解いているとか。ときどき、不詰作品が混ざっているが「とことん手を読むからわれわれには棋力向上につながる」と、不詰作品の意外な効用を話した。

神吉五段も十数年前からの詰パラ会員で一度だけ解答応募をしたことがあるそうである。「全題正解と思っていたら一題だけ間違えた。そのショックで、もう解答する気が起きなかった」。

神吉五段といえば衛星放送の「囲碁・将棋ウイークリー」でお馴染み。実は神吉五段を通してNHKに取材の申し込みをしたのだが遅すぎた。もっと早く気づいていれば……。

ゲストの桂九雀氏は寄席、テレビなどで活躍している落語家で、桂枝雀氏の弟子。高校時代には将棋部に所属しており、詰パラの存在も知っていたとか。「将棋の格言が落語にも生かされている」と、いくつかの例を紹介してくれた。

このあと、明石六郎氏から「詰将棋パズル」の説明がされた。これは玉位置による尻とり遊びで、11玉の図から解き始める。詰め上がりが13玉なら、こんどは初形13玉の作品を解く、というもの。55の都で玉が詰めば完成である。

▼第一部　後半

後半は場所を変えて「将棋詰将棋祭り」。一般の将棋祭りのように、一つの会場でたくさんの催しを並行する。

手前では、もう一人のゲスト・鹿野圭生女流一級による席上対局。対戦相手は参加者から募集し、橋本孝治氏と決まった。手合いは角落ち。解説は森信雄五段で聞き手は桂九雀氏。棋譜読み上げと記録は京大将棋部の菊田裕司

君と山田康平君が務めた。実戦は下手の橋本氏が中盤で金銀両取りの桂打ちを決めて快勝した。

中央では浦野六段と神崎五段による指導対局が行われた。

奥では詰将棋研究会による「短編詰将棋早解きコンテスト」（出題は中日スポーツ昭和63年1月から5月までに掲載された中田章道五段の作品）。54題を一時間でどれだけ解けるか、を競う。腕自慢の17人が挑戦した。

会場の外では棋書販売が行われている。飛ぶように売れたのが、清水英幸氏の「読む将棋パラダイス」（百円）。詰パラをパロディ化した小冊子だ。80部を完売したからすごい。

▼第二部　パーティ

第二部は立食パーティで司会は水上仁氏。ゲストには歌手の難波洋子さんとピアニストの脇郁子さんを迎えた。詰将棋と音楽を取り合わせたパーティは明石氏の案出によるもので、この世界では斬新な企画だといえる。

難波さんはオペラ歌曲が専門だが、シャンソン他のレパートリーも広い。詰将棋は3手詰くらいなら解けるそうだ。脇さんはクラシック、ジャズを中心にピアノソロのライブ演奏で活躍している。

参加者からは「こんなに豪華にして大丈夫ですか」「これで五千円は安い。一万円ぐらいのパーティだよ」などの声が出たほどで、十分に満足していただけたようである。第二部の方は、大会運営の中心となった明石・水上両氏の手腕がいかんなく発揮されている。

途中、水上氏からクイズの出題があった。詰将棋・将棋・一般常識の三部門に分かれており、挑戦者はどれを選んでもよい。詰将棋は「いわゆる〝変長〟とは？　①変化長手数②変ホ短調」「次の作家のうちペンネームは？　①柳原裕司②上田吉一③明石六郎」など、ツメキストにはごく簡単なもの。一般常識で「昨年のドームでの巨人・阪神戦はどっちが勝った？」という問題が出たが、われわれにはこちらの方が難しい。

さらに懸賞問題の結果と賞品の抽選が行われた。

内藤九段の詰将棋には19人から応募があり17人が正解。「誤解者は若島正他一名」に場内は爆笑。珍しいこともあるものだ。なお、この詰将棋は来月号の大学に出題されるので、皆さんも挑戦していただきたい。（よって会場では正解を発表していない）

詰将棋パズルは応募28人で正解は23人、藤井国夫氏の必至問題は応募12人で正解は10名だった。

早解きコンテストは、伊藤正氏が46題正解でトップ。腕はまだまだ衰えていないようで、ぜひ復活してほしい作家である。2位は成田忠雄氏（44題）、3位は山崎泰史君（40題）。

全詰連の再発足

森田正司

5月4日に大阪で開かれた第七回全国大会において全日本詰将棋連盟（略称＝全詰連）の機構改革がなされた。そもそも、全詰連が結成されたのは30年も前のことであり、鶴田主幹亡きあとは有名無実化していたので、最近の詰パラ読者の中にはその存在すら認識していない方が多いのではないかと思われる。

そこで、今回の再発足にあたり、改めて全詰連の歴史を振りかえって、その役割を見直してみたい。

一、全詰連の結成

全国の同好の士の大同団結を目指して、鶴田諸兄氏が全詰連を結成したのは昭和37年のことである。まず3月4日に名古屋市公会堂に26名の同志が集まって本部の旗上げがなされたのを皮切りに、18日には大阪府立労働会館に37名が出席して関西支部が、また4月1日には東京・後楽園「涵徳亭」に68名が参加して関東支部が結成された。本部責任者は詰パラ編集主幹が、また関西支部長は西村英二氏、関東支部長には小林豊氏が就任され、これで「詰将棋パラダイス」の全国的な支援組織ができ上がったのである。

これを機に、詰パラは同年7月号から全詰連の機関誌と位置づけられ、読者はすべて全詰連の会員とされるようになった。また、全詰連の主要な事業として、古図式全書（全12巻）や数々の個人作品集などの詰棋書が、その後続々と刊行されたのである。

さらに、①詰将棋規約委員会（綿貫英助委員長）、②著作権委員会（佐々木秀雄顧問弁護士）、③段級位認定委員会（委員＝工藤紀良・富沢尊儀・藤倉満）をはじめ、④詰将棋検討委員会（投稿作の検討陣）、⑤作家委員会（新聞雑誌への作品斡旋）という五つの分科委員会が設けられて、それぞれの活動が開始された。

また、全国大会をはじめ、詰棋人の集いが、次のように東名阪を中心として頻繁に催され、同志の交流が盛んになったのである。

37年10月28日、第一回全国大会（名古屋・伏見荘、47名）

39年5月3日、詰パラ百号記念全国大会（同、50名）

40年5月9日、第三回全国大会（東京・七条兼三邸、90名）

40年10月10日、名古屋大会（恵比須寮37名）
41年5月1日、第四回全国大会（東京・日本女子会館、55名）
41年10月9日、関西大会（神戸・金平39名）

二、23年ぶりの全国大会

ところが、その後、大会はぷっつりと跡絶えてしまった。どういう訳か、46年5月号からは詰パラにも「全詰連機関誌」の表示が消えてしまった。

また、46年7月に西村英二氏が、48年6月に小林豊氏が亡くなって、関西支部長は井島寛氏、関東支部長は黒川一郎氏が引継がれたが、そのころから、見るべき活動は行なわれていない。代って（?）、熱心家を中心にしたサークル活動が全国各地で地道な活動を続けるようになったのである。

時は移り、平成元年5月5日、詰パラ四百号記念の全国大会が柳原裕司新編集長を中心に名古屋郵政会館で開かれた。実に23年ぶりのこととて、全国各地から84名もの会員が集まったのである。翌平成2年5月3日には、相次いで物故された黒川一郎・七条兼三両氏の追悼を兼ねて、第六回全国大会が東京の将棋会館で行われ、全国から百十一名もの大盛会となった。

この席上、鶴田主幹亡きあと、ともすれば有名無実になっていた全詰連の今後のあり方について問題提起がなされ、会則の見直しと組織体制の整備を一年かけて行うことが合意されたのである。

三、新体制で再出発

平成3年5月4日の第七回全国大会の前夜、会場の大阪市北区の山西福祉記念会館で、初めての幹事会が開かれた。幹事は柳原編集長自身と、関東地区の門脇芳雄・森田正司・柳田明・角建逸、中京地区の清水一男・関半治・（酒井克彦氏は欠席）、関西地区の岡田敏・宇佐見正・明石六郎・水上仁の12名。いずれも柳原編集長に乞われて幹事を引き受けた人ばかりである。

この席で、新しい体制に即応するように会則が練り直され、続いて幹事の互選により会長に岡田敏氏、副会長に門脇氏、会計に柳原氏が決まった。なお、会計監査は安平昭二氏にお願いした。これらはすべて、翌日の大会（＝総会）で報告され、満場の拍手で承認されたのである。

また、全詰連として当面の二大事業である看寿賞選考と段級位認定を軌道に乗せるために、それぞれの委員会を設けて推進することになった。前者を担当する委員は、門脇・森田・酒井・柳田・角の5名。後者の委員は岡田・宇佐見・清水・関・明石・水上の6名である。

なお、新しい会則（別稿参照）を討議した際、看寿賞に関して何人かの幹

事から「この機会に、本来の全誌対象に戻すべきである」との意見が出されたが、これは今後の検討事項として残されることになった。

四、これからの問題

以上の経緯から明らかなように、全詰連と詰パラは車の両輪である。鶴田主幹が健在のときは、同氏が心棒になって双方を一つのものの如く動かして来られたが、若い柳原編集長としては「詰パラの発行で精一杯なので、全詰連は幹事会が主体になって運営して欲しい」との意向である。

従って、全詰連の運営は詰パラの経営とは切り離す必要がある。そこで、早速、看寿賞の賞金をはじめ、全詰連の運営に必要な資金をどう調達するかということが大きな問題となる。

考えつく資金源としては、

①賛助会費（例えば一口千円）を募る

②段級位免状の発行料を充当する

③新聞・雑誌への作品斡旋手数料

などがあるが、これらを幹事会で検討し、遂次、実施していく予定である。ついては、これら（財源問題や看寿賞のあり方）に関して、会員諸氏のご意見を詰パラの読者サロン欄にどしどし寄せて頂きたい。

改めて言うと、全詰連の役割は、次の三点に要約される。

①詰パラの発行を支援し、その法燈を永遠に絶やさないこと

②全国の詰将棋愛好者の交流の輪を拡げ、親睦を深めること

③詰将棋を、日本固有の文化として、一般社会に正しく認識されること

ともあれ、今回の再編成により、ようやく全詰連の「形」が整った。営利を目的としない趣味の世界で、このような団体を組織し、運営していくのはきわめて難しいことであるが、幹事諸氏の熱意と、全国の同志諸兄のご理解、ご協力により、これからは「実」のある全詰連に育てて行きたいと念願するものである。

会長に就任して

岡田　敏

詰将棋界も昭和の黄金期を経て、平成時代に入りましたが、その隆盛ぶりは物凄く、昭和37年に設立された全日本詰将棋連盟（略称＝全詰連）を再発足させようという気運が盛り上り、5月4日に大阪で開催された第7回全国大会を契機に再発足が決定しました。

そして、その時の幹事会で全詰連の

会長に選んで頂きましたが、この大役を、皆様のご協力によりまして、無事果したいと思っておりますので、よろしくお願いします。

さて、では、この全詰連はどのようなもので、今迄に何をしてきたかについては、森田正司氏が詳しく説明されることになっていますので、それを読んで頂きたいと思います。

今回再発足するにあたり、先ず会則を練り直し、次に看寿賞選考委員会と段級位認定委員会を設立して問題点を討議し、現在のものより、もっと合理的なものにしていこうということになりました。

目下の所、全詰連の最大の悩みは、運営資金がゼロで、色々な事業計画の推進が実行出来ないということです。この件について、皆様のお知恵を拝借したいと思いますので、ご意見をどしどし編集部へお寄せ下さるようにお願いいたします。

全詰連会則

第一条（名称）本団体は、全日本詰将棋連盟（略称・全詰連）と称する。

第二条（目的）本連盟は、詰将棋を日本固有の文化として継承・普及・発展させると共に、愛好者の交流と親睦をはかることを目的とする。

第三条（会員）連盟機関誌『詰将棋パラダイス』の定期購読者をもって会員とする。

第四条（幹事）本連盟の運営の為、幹事若干名を置く。幹事は『詰将棋パラダイス』編集長及び、会員の信任を受けた者とする。編集長以外の幹事の任期は二年とする。ただし、重任を妨げない。

第五条（会長）本連盟に会長及び副会長を置く。会長は幹事の互選で決める。会長は本連盟を代表する。会長及び副会長の任期は二年とする。ただし、重任を妨げない。

第六条（会計）本連盟に会計及び会計監査を置く。

第七条（総会）総会は、原則として二年に一回開催する。

第八条（幹事会）幹事会は、会長の招集により開催し、事業の推進などに当たる。

第九条（委員会）幹事会は、必要に応じて事業ごとに委員会を設け、委員を委嘱する。委員は、幹事以外の会員からも選ぶことが出来る。

第十条（事業）本連盟は、次の事業を行う。

①機関誌『詰将棋パラダイス』の発行を支援する。
②看寿賞、鶴田賞を決定し授与する。
③詰将棋段級位を認定する。
④詰将棋書出版を支援する。
⑤著作権の確立と保護を目指す。
⑥その他、詰将棋の普及・発展にかかわる諸活動。

（附則）連盟本部は『詰将棋パラダイス』編集部に置く。